

月報 17

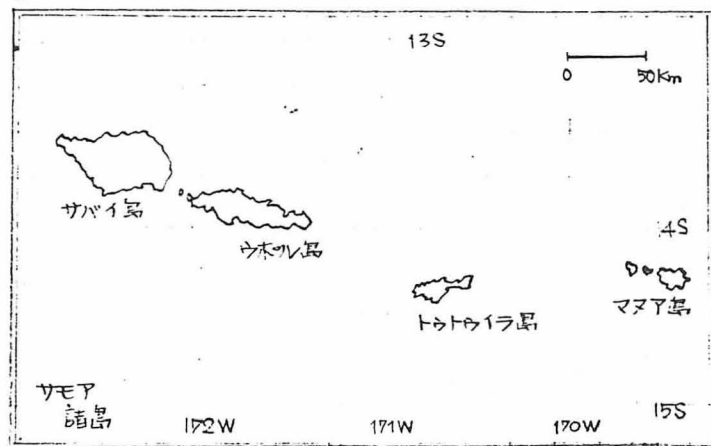
1980. 11. 12

*

同僚の山本^{マツ}泰氏と、人類学専攻の山本^{マツリ}真馬氏が、西サモアをフィールドに、数年来多面的な調査・研究をすすめている。概要は近く、両氏の手により『東京大学新聞研究所紀要』に発表されるはこびであるが、それに先立つ向回かの動画的な報告がきっかけとなって、わたしもサモア社会のメカニズムについて考えるようになった。

西サモア(Western Samoa)はポリネシアの一角、トンガ島のほぼ北隣りに位置する、独立国である。4つの島からなるサモア諸島のこの東半分は現在、アメリカ合衆国の信託統治下にある。この社会で何より興味ぶかいのは、十分に発達した伝統的な交換システムが今日もなお、人々の日常を支配していることである。

サモアの人々は、自分たちの生活の基本単位のことを、*aiga* とよんでいる。この *aiga* という集団は、南西太平洋地域に広くみられる地縁-血縁的な集団のあれこれと、さまざなな共通項をもつのだが、いざその本質を的確にのびせようとすると容易なことではない。extended family という術語をあてはめてみても、あるいは ambilineal descent group とか land-tenure group とか規定してみたところで、どうしてもどこか必ず急所を外れて感じまがった概念を捉えたことにしかならないのである。しかも *aiga* ということは、文脈に応じて幾通りもの多様な



いみを含み、そこでの用いられるこの local term を尊重して、そのまま用いることとしよう。そのほかの local term にしても、同様の理由から尊重される。

【短評】 ----- 「女性の ----- 第3集」の論稿前回にひき続き、たいへん興味深く読ませていただきました。

女性が<産む>性であるということは、ふつうそれが自明であると考えられているように、実はそれを現実に担うべき女性の意識にとっては(or としてさえ)必ずしも単純に自明の事柄ではないと思われます。しかも、女性にとって<産む>という問題は単に現実処理の問題である以上に、生きていく様々な^多局面で会うことを余儀なくされる悪しきイデオロギー(「産む」という機能に女性の本質規定をまいてしまうために)の如きものですから、現在の生命科学の状況に照らし合わせて採集今あるような女性の概念は解性しかねないのだ、という論旨は、今後現実がどのように進行してゆくかということも別にしても、これほどに執拗的で魅力的なものはないと思われまふ。そして、これまでほとんどの人間が女性の胎内からしか生まれてこなかった、というたかだかの事実性が、動かし難い真理になりかわってしまっていることへ、この論稿がかける揺さぶりの有効性はたいへん大きいものでもあると思ひます。というのも、人間が女性の胎内からではなく生まれうる事態になったときに、従って男性と女性との間の境界が今あるよりははるかに曖昧なものになったときに改めてくまりと容を現わすであろうところの、(そのとき尚)「私たちはお互いを、自身をどのように了解するのだろうか」という問題は(論稿では羊水チェックの項で述べられていましたか)、その部分か及至かなりの部分は、見ることの易しすぎる事態(女性が<産む>性である、という)の蔭で見えにくくはいえ、すでに十分に現在の問題であるはずだと思われからです。

「生命科学と女性の権利」に対して寄せられた、荒尾信子氏よりの私信(1980年4月17日付)

各 *aiga* は、主食であるタロイモを栽培するカタワラ、日々の飼育やカヌーによる漁撈もいとなんでいる。*aiga* の経営は、*matai* (=title holder) によって統轄されており、各 title は代々継承されてゆく。(租税部屋の、年寄株のようなものだと思えばよい。) これら title は同一の起源を有すると信ぜられており、その最も由緒ある title は、いまでも royal family のあいだで継承されている。*matai* には、*ali'i* (首長) と *tulafale* (代弁首長) との2

【短信】 …… こんどいただいた「生命科学と女性の権利」は、一気に読ませていただきました。

男性～女性の関係、役割を、地球上の、現在～未来にかけての生態系の中に位置けてとらえ直し、あらたな共存原理を見出していかねばならぬ時代にハハハハさしかかったようです。その意味で p.25 にのべられているあたりは、最もよく理解できました。しかし日本の場合、とくに、両性の間に、思想的対立点とでも言うべきものがあるならば、まずそれを両 side から、もっと sharp に出してみることに先決ではないでしょうか。男も女も、"女が産む性であること" にあまりにこだわりすぎているのではないか（もちろん、橋爪論文からそういう印象を受けたのではなく、一般論としてです。）——と感じています。人生のどこかの分岐点で、"産む性" にアイデンティティを求めうる pattern になっていくか、それとは、^{*}〇々とかかわることによって、かえて自分の生き方が、人類の一員としての perspective をもって明確になっていくか、の、どちらかのタイプに分かれていくのかもしれません。両タイプを支えている"生きる意思"が、遠くから論争の火を吹くのではないのでしょうか。われわれの生活習慣の中に、見えないものを見ようとする好みももう少し深入りしてくるならば……。それに少なくとも10年くらいかかるかもしれません。フェミニズムは、生態系のバランスの問題を背負わされはじめています。その問題を引き受けていくには、個性主義（個人主義ではなく）の、いまた光のあてられない部分にさぐりを入れる必要があるようです。……

* 1字判読不能。

板垣葉子氏よりの私信 (1980年3月16日付)

種類があり、後者は特殊な職能であって、fono (matai の会議) や、fa'alavelave (aiga 間の交換儀礼) などの機会に独特の定型的な言いまわしを組合せた名詞子の弁舌をふるうという重要な役まわりを演ずる。aiga 内では激しい性の禁忌がはたらき、男女の接近は慎重に回避される。別な aiga の男女であっても、過去に婚姻を結んで現在でもその関係が生きている（交換を折にふれながらお交わしつづけている）aiga 同士の間では、同一 aiga であると同様、通婚が禁ぜられる。彼らは「同じ aiga」なのだ。こうした婚姻規制の結果、サモアの全 aiga は、恒に攪拌され、とめどなく新しい方向へと織りだされて

ゆく緊密な交換の網の目によって、結びあわされることになる。

婚礼、第一子誕生、葬礼のあるたびごとに、どの aiga も毎週のように fa'alavelave に巻きこまれる。この交換儀礼は、通常幾つもの局面を含むこみいだたものであるが、基本的に言うならば、それは女性の与之手/受け手のあいだでの、toga (女取)/oloa (男取) の交換を主題にするものだ。男取は、調理したスタモを中心とし、女取は、象徴財すなわち ie toga (fine mat) を中心とする、あたかも食欲と性欲とが相互に補填しあうものであってもあるかの如くに。現在はカツメや紙幣 (サモア^の) も交換される品目のなかに登場してきているが、それらはおおむね男取の側にかきとられているとみられる。ie toga, この注目すべき貨幣類似物は、トンガから伝わったと信せられている、風呂敷のような大きに手間のかかった織りものであり、婚姻交換とともに aiga のあいだをぐるぐる周回している。ie toga を大量にかきあつめてこなければ、正式の婚礼をいとなむことはできないのである。

さて、このような予備知識をふまえて、わたしが考えてみたいことをのべてみよう。サモアのこの交換システムは、ひとつの社会的な装置として、どのような性能をそなえているのであろうか？ ま、たく向の役に立たない布きれにすぎない ie toga の勘定にあけくれ、一生 fa'alavelave のやりくりに汲々として縛りつけられている、そんなサモアの人々が懸命に維持しているこの交換システムのいみするところとは、一体いかなるものであろうか？ われわれの目にしてはいる交換とは、社会の全域にわたる事実である。実現される個々の交換は、装置のおよぼす効果やその帰結にすぎない。装置(超主体性)の性能を計測しようとする場合に、交換にまつわる人々の意欲や感情といった効果(主体性)の次元の繁雑を生まのままもちだすという筋ちがハを犯してはならない。(そのような筋ちがハが、近代ということの常套である。) として、交換が全域につくりだす現象が、(たとえば ie toga が「不足」するといったような) 量的な現象であるならば、サモアの人々が棲息する空間に及ぼされる効果によって装置の性能を計測するための「数量的な分析」というものもまた、有効であるかも知れない。近年注目をあつめていっているような「数量経済史」というものが可能であるなら、「数量人類学」というものもあってよさそうである。

『「チンパンジーは語る」か』(橋爪大三郎)についてのコメント

1979-5-18 (金)

巨 明志

最初の課題設定——つまり、(1)/(2)の二元的対比ではなく、(1)/(2)/(3)/(4)の四元的対比によって、類人猿の「ことば」をとらえるべきこと、次に(6)-(a)/(b)、(7)-(a)/(b)を人間の言語と比較する場合のポイントとすべきこと——は、きわめて適切だと思います。また全体の論旨についてもおおむね賛成ですので、コメントは、個々の細かい点に限定することにします。

(註=橋爪) 上にいう四元的対比、ならびに、(6)-(a)/(b)、(7)-(a)/(b)とは、それぞれつぎの命題をさす:

- (1) 人間は、口頭言語(verbal language)を操る。
- (2) 類人猿は、口頭言語を操らない。
- (3) 人間は、非口頭言語(nonverbal language)を操る。
- (4) 類人猿は、非口頭言語(?)を操る。
- (6) 人間の非口頭言語は、口頭言語と同様の構造を具えてく(る)。(a)いる。(b)いない。
- (7) 類人猿の非口頭言語は、人間の非口頭言語と同様の構造を具えてく(る)。(a)いる。(b)いない。

また以下、巨コメントが言及する頁数・行数は、第1草稿のもので、『止境』31号に印刷されたものとは、対応しない。

・ p.5上23~25: 絵札言語の文法には、格文法……のアイデアに、よく似たところがある。

格文法と絵札言語の文法とでは、比較するもののレベルが異なっていると思います。つまり、格文法は、実際の言語を説明するための文法モデルであるのに対して、絵札言語は一つの言語であって、説明される対象とみるべきです。どうするか?

そこでいくつかの補助線をひこう。まず、フタとタロイモについて。数多くの豚のうちこの2つがとくに重要であるのは、サモアの人々の生活を十分に維持するだけの食料源が、これらに限られるからである。

栽培植物のうちでも穀類が、長期間の保存性を有していて、大規模な権力(単力)を支持しうるのに対して、タロイモのようなイモ類は、そうした農作

から、絵札言語を説明するのに格文法モデルが最も適切だろうとは言えても、同じレベルで比較することはできないと思います。実際、格関係が表層においてどのように表示されるかは、個々の言語によって異なるわけで、英語では、主として前置詞や語順によって(ドイツ語やフランス語ではさらに屈折が大きな役割を演ずる)、日本語では主として後置詞(格助詞)と語順によって、示されます。(詳しいことは知りませんが、中国語では、語順だけで格関係(語が文の中で果たしている意味的な役割)が示されるとすれば、絵札言語に近い言語なのかもしれません。)絵札言語のように、語順だけに格表示を依存させることは、それだけ情報論的に言って負荷がかかるので、文法上の構造から見ると、深層格が示すような「認知構造」に依存する度合いが大きくなる、と言えるかもしれません。

・ p.5下216~p.6上25: まず……以下

何を言いたいのか、よくわからない。疑問・否定などの構文は、幼児の文法では、簡単な基底部の操作に還元されるから、これらの構文を用いるだけでは、(一見複雑な心的過程と結びつくようにみえるが)、人間の心的過程や言語構造と同様のものを、類人猿がもっている、と結論することはできない、ということでしょうか?

(註=橋爪) この部分の記述は、巨の指摘するような内容を意図しておりながら表現が適切でなかったため、第2稿では書きあらためられた。

・ p.6 27: 抽象的な文法関係

「文法関係」というのは、生成文法(あるいは一般に言語学)では、主語-目的語とか、主要部-修飾部などのような、形式素のあいだの文法的な関係概念を言う併語として用いられているようです。(cf.「関係文法」とは、このように「文法関係」の概念を基底に据えて文法モデルを構築しようとするものらしい。)

・ p.6 上26~下212: わたしのみるところ ~ はっきりしたことは言えないはずである。

このパラグラフでは、絵札言語は、線的配列が空間的な配列へと変換され、抽象

物ではない。タロイモは、土中にある間は11つでも食べられるのだが、11つ人掘りだしてしまえば、地上ではたちまち腐り始める。それゆえにイモ類は、種々の点ではないのである。トロリアンド島の有名な事例では、収穫後のタロイモが贈りものとして山と積みあげられ、食べるより先に腐敗してゆくが、このような不合理な破壊=腐敗が、まさに彼らの平和のためには必要であるのだ。

的な統合構造にかかわる問題がすりかえられているがゆえに、生成モデルの前提が成立していない。したがってフィンプンジーは別様のアルゴリズムによって反応しているのかもしれない。こうした可能性を排除できなければ、類人猿の文法操作については、はっきりしたことは言えない、ということがのびられているように思われます。結論としては、誰かにこの通りでしょうか。推論の過程（とくに生成モデルの前提に関して）のなかにもっと重要な問題が潜んでいるように思います。

まず記述の上で、「始発記号 "S" から出発して最終的な記号連鎖に到るまでの一連の操作の全体」が「時間的」であると読みといる（時間的な配列と空間的な配列との違いが問題になり、次いで文の生成モデルの話に移っているのだ、そう読みとれる）のは、誤解を招きやすいのではないのでしょうか。確かに、英語で "He does not" と発音された場合、"He" が主語で、否定助文で、次に動詞がくるはずだというようにしるべき構造が浮かびますが、これはまったく心的過程の問題であって（これはただ単に認知過程に限らず、発話の場合にも、次にくる動詞が決定しないうちにこう発話してしまふことがある）、文法的な操作が時間を生み出すわけではない。

考えてみるに、「要素記号の（本来は時間的であるはずの）線的配列」は、文の生成モデルの前提とみなすよりも、口頭言語あるいは手話の制約性もしくは特性とみなすべきではないでしょうか。というのは第一に、生成文法モデルは、記号連鎖だけでなく文の構造記述をも生成するものと考えられているからです。（変形規則は、構造記述を前提としまあし、したがって文の構造的多義性は、構造記述を生成するような文法を前提にしなければ説明できないでしょう。実際、フィンプンジーが、手話なり絵札言語において、文の構造的多義性を理解したり表現したりできるのかどうか、あるいはそもそも手話や絵札言語に、文の構造的多義性に相当するものが存在するかどうか、ということ、これらの「言語」の構造や類人猿の文法能力を説明する上で、一つのポイントになるように思われます。）したがって、生成文法モデルは、Sに支配されるような特殊なクラーウ（=文の構造記述）、音声に変換される場合には線的配列となるような記号連鎖を伴う特殊なクラーウを生成すると考えることができるわけですね。仮に（フィンプンジー

無為徒食こそが人々のきまめて描く夢想の樂園であるが、それはまた破壊的な軍事力の温床でもある。人々はタロイモの山の高さを競いあう。こうした破壊=腐敗の結果無に帰す有用労働は、人々の感情の均衡を帰結するであろうが、それはまたおどろましい破壊=殺人を防止してあげるはずなのだ。さもない場合は攻撃的に行使されていたかも知れない集団的及生産的取捨。

アーク知覚する）絵札言語が、線的配列に還元されないような空間的な配列をもつとしても、そのような「言語」を生成するモデルを想定することはできるわけです。（その場合にはもちろん、実験者が当初想定したのとは別様のアルゴリズムに、フィンプンジーは、従っていることとなります。）あるいはまた線的配列であったとしても、有限状態文法で生成できるものであれば（実際、単一形態素による「否定」や二つの記号の組み合わせによる記号の生産的使用は、有限状態文法によっても説明できるはず）、類別や想起などのある種の能力を前提とする刺激-反応図式の学習理論で説明できることとなります。

生成モデルの前提は、記号が線的に配列されているかどうかということではなく、むしろ生成されるべき対象の範囲が限定できるかどうか、つまりある「文」が文法的であるかどうかを確定できるかどうか、ということだと思えます。実際、生成文法は、文法的な文のみを生成する装置ということになっていきます。（この点で手話が「発話の状況に依存してその内容が理解される度合いが大きい」ため、殆どの発話が容認可能となってしまう」といふ、これも手話に生成モデルを適用してその文法を説明するという方針は疑ってかかるべきではないわけですね。）こうした前提があるため、言語学者の関心は「境界事例」に集中するようになります。成人の言語の構造は、一応 informant による報告という形で、生成モデルの対象範囲が示されるわけですが、しかし、幼児の場合にはそうもいきません。（まさか幼児に「この文は、きみの文法に照らして、文法的ですか」などと尋ねるわけにもいかならぬでしょう。）そこで、発達心理言語学では、習得の順序と「誤用」（とりわけ「過剰な逸脱」と呼ばれる現象）に注意するようになります。たとえば、よく知られているように、不規則動詞 come の過去形は、最初 came として覚え、次いで規則動詞の過去形を習得した後は、comed と「誤用」し、最後に正しく 'came' を用いるようになる。この場合、これらの習得の順序からして、初めの came は「動詞+過去形」と分析されるような構造をもつていなかったわけですね。また、この例からだけでは簡単に結論を下せませんが、多くの「過剰逸脱」に関する「誤用」のテーラからして、幼児は文法構造を具え、言語を創造的に使用しているはずである、と推論できるわけですね。しかも、類人猿が操る手話や絵札言語については、「文法」によって生成されるべき対象の範囲はア

これに反して、アタは、多分に権力的であると考えられよう。それは生きてまま歩きまわり、丈量に土質所へあつめることもできるから、底のである。ニューギニアの高地民族が管束 te/moka システムが、興味ある実例を提供してくれる。この交換システムにおいては、交換は、一直線にのびた径路の上で、くりかえされる。人々はイモ（？サツマイモ）を栽培する一方で、アタを飼育

アギリしまじんし、したがって「誤用」と呼ぶべき基準も明確ではありません。ですから、どのような順序でその「言語」を習得したかということにさしあたりは注目しなけりばならぬでしょう。この点に関する詳しいデータについては、よく知りませんが、類人猿の「言語」の研究者は、キンパンジーがいくつ単語をおぼえたとか、二つの語を組み合わせて、新しい「表現」を作り出したとかということに単純に喜んでいて、データの取捨な無がはっきりしないようです。猿がしゃべるといふことに対する驚きは、研究の動機としては十分なものでしょうが、もっとつ、こんだ分析がなされなければ納得のいくものとはならぬでしょう（Lindenの記述は、センセーショナルな面が強調されすぎていて、あまり感心できません）。

たとえば、「ワシュー」の場合、人間の幼児と比較すると、関係を表現する動詞の習得が早く、一語文の段階でそれが表現されているようです。しかし、幼児は一語文のなかでそれを用いることはない。この順序は、単語の組み合わせがどのようなものかという推論に関わ、てきます。幼児が単語を組みあわせる場合には、一語文において潜在的なものであった文法関係が明確に現われるような形で、二語文を形成していく。このように、動詞は明確な文法関係の分化のもとに使用されていると考えられます。ところが、ワシューのような習得の順序においては、そうした議論は互にたないわけでは、ありません。一語文で使用される動詞は、ある関係を表現するものではあ、ても、出来事を想起したり出来事に反応したりするだけのものかもし、二語文の結合も、明確な文法関係の分化を前提にしているのかどうかは明らかではないように思われます。さらに、語の結合に関して、人間の言語には、「春は冬の後にくる」とか「食事の前に手を洗いなさい」というように、文の上の順序が出来事の順序と逆になっている場合がありますが、このような表現をキンパンジーは理解したり発話したりできるのかどうか（人間の幼児には、こうした表現が理解できない段階があるようです）。類人猿の「言語」に関する実験から、類人猿が出来事に言及したり欲求を言表したりすることができるとは明らかなようですか。（どのような）統合構造を介して言表を線的に配列するのか、（あるいはそうでないのか）ということ、現在のところ、まだはっきりとは言えないように思われます。

する。イモ栽培は彼らの segmentary lineage system が壟断するのだが、スダの飼育は各人の判断に任されている。交換ははじめある一定の向きをもっているのだが、それが一直線にのびた交換経路の一方から他方の端へと教母がかりでたどられていくにつれ、徐々にスダが集積されはじめる。頭教の過剰な権力の過剰を生む。スダの集積を担い、また逆にそのスダの集積にかえて支え

られていくような権力の、人的形象——The Big Man——が現われて、この権力の増殖過程はいつそう加速される。この権力の膨張は、交換の連なりがついにその径路の終端に達したときに、まさにその極に達し、数千頭のスダが11ちどきに屠殺される大狂宴において、その幕をとじることになる——交換は、そのルートをもた代々の端へと向かって、たどりはじめる。この直線状の交換経路は、そのなかで移動するスダとともに周期的な波動をくりかえす、権力の線型加速装置とならである。

サモアにおいても当然、スダは、権力の過剰の温床であろう。ただサモアの場合、スダの分泌する権力の効果は、かならずしも眼にみえてこない。というのは、交換の経路が線状の加速の回路を振れるよりもさきに、たえず攪乱され、権力体の結晶化が阻まれているからである。そこに介入してくるのが、交換のなかでスダに対置される象徴財、ie toga にはかならない。

ie toga は、象徴的な実物性を有する財である。（実物であるとは、より抽象的な信用を決済する手段であり、当該社会が用意した基底的な実定性の本準にあることである。） ie toga は、ことさらに任組まれた稀少性である。それは（女性の）莫大の労働時間が投入された加工品であるゆえに、まず稀少であり、数が限られ増殖し之ぬものであるゆえ、また稀少である。（後者の11みでは、matai の title は、威信の稀少性をことさらにうみだす、装置のもうひとつの工夫である。）有用性という点からみて、この ie toga はまったく否定的なものであり、なにものかの破壊の象徴であるとしかたない。これが交換儀礼の与えるシチュエーションのなかで、スダと並置されるときに、スダは同じく破壊=屠殺にみまわれ（=料理され）て、その権力性を解除されなければならぬことになる。（スダのこの破壊は、たしかにある種の威信をうむ。しかしその威信は、生きたスダの担いうる権力とは異なり、空間の局所的な作用にとどまる。スダという社会的な定在は、空間のなかである種の‘崩壊’をとり、ニュートリノのように作用域の11た11列種の作用素に転化するのである。）しかも ie toga は、女財である。そのお蔭で、女性の配分と、スダの配分とが、厳密に関係づけられ、同時に解決されることになる。

山本真鳥氏の仮説的な推測によるならば、南太平洋海域の島々の社会構造は、トンカとサモアとを両典型とするような、2大類型に大別されるのではないが、

【短信】 前略 修論レジュメ拜見しました。軍隊論は理想のほんの一角かと思
 いますが、企画のほどはうかがいしることができるようだと思います。軍隊のこと、
 あるいはもっと広く昭和の大動員体制のことは、戦後改革以上に、日本の近代に
 本質的と思っています。昭和10年来の高度国際国家建設=高度成長の出現（日産
 ・電工・重工の躍進）は、昭和40年代末までの一貫したテーマ：前資本制の日本
 手の農村共同社会と、資本制の産業部分をいかに結合させるか、をめぐって回
 転しています。その前半は、農本主義から超近代主義までを隆する天皇制複合 vs.
 マルクシズムの図式にあり、後半は、自民党的農産複合（安保体制）vs. 華新幻
 想の図式にありました。この期間を通じて、農村は解体しつくされ、目下、資本
 制的な経営形態（請負耕作と、自作制の解体）に途をゆすりつつあります。帝国
 軍隊は、農民的エートスと近代的身体技法（規律訓練）の適合の上に組合わされ
 た装置であって、その性能は高かったと言わねばなりません（『ソビエト帝国の
 崩壊』第2章）。兵士にとっては、（不生産労働であるため）紙的な身体技法（
 管理される身体の自覚と発見）の体験であり、ちょうど『アロ倫』がさしめす
 ように、この「兵営内エートス」が全域化するという体験が、戦後経済=民主主
 義の実質であるのです。（華新幻想は、共同体喪失感に由来する代償です。）二
 のような日本近代の固有形は、農村と華新幻想が崩壊しつきたちょうどいま、
 Turning Point にあります。Foucault の監視論が、参考になるかもしれませんね。
 よい仕事を期待しています。草々。

佐藤 便二様

1980.11.11.

藤川 大三郎

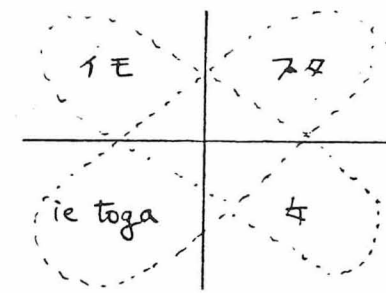
という。トンカタイアの社会は、ピラミッド状の厳格な、垂直的な権力構造に
 よって特徴づけられるが、それに対するサモアタイプの社会の場合は、はるか
 にルーズな相互的な関係が基調となる。前者の専制的な王権に対する、後者の
 全員一致型首長会。向か象徴的のような貨幣類似物が見出されるのは、この後
 者のタイアに限られるらしい。

もしこの仮説によって、ie toga に経由する効果をはかるとすると、それは、
 女性の配分を指示の基体とし権力の解除をその含意とするような、ひとつの演
 算子であることが、明瞭となる。女性の配分は、ヌタや権力の配分に比べて、
 本来はるかに安定したものである。ie toga は、このふたつの配分を、降着す
 る。ちょうど女性があまねく空間に一律に位置づくのと同じく、空間は、権力
 の密度を局部的に高めるような所りたためなどが生じることのないよう一律な

曲率を保つべく注意ぶかくひきのばされ、特異点の発生が回避される。交換儀
 礼である fa'alavelave は、すべて（遅延された）婚姻交換にほかならない。
 といゆえにこのヌタは、空間のあらゆる地点で一律に屠殺=破壊されてゆか
 なければならないのである。空間における婚姻の一律・等方性を、権力の一律な
 解除へと転写する仕掛けが、この ie toga に潜められている。

ヌタというのは、本当はおそらく余剰な生産物であるのだ。しかし、サモア
 のシステムは、タロイモをギリギリ生存水準までしか生産しないのであ。こ
 のこる用役は、ヌタの飼育、ie toga の生産、fono（会議）、fa'alavelave に
 費される。この結果、ヌタは有標づけられ（marqué）て、無標のままであるタ
 ロイモから浮きあがり、かえって稀少なものとなる。サモアの古典的な社会に
 おける4つの基本的な取柄は、したがって、イモ/ヌタ/ie toga/女であって、
 それぞれが他と対立することにより、その独自の位置を占めている。イモとヌ
 タは、ある aiga のものであるとして、aiga から aiga へ移動するときには、料
 理され、その容をかえてしまうのだが、それに対して、ie toga と女性とは、
 そのようなことのないまま aiga 間を移動しうる。イモと女性とは、「家庭的
 に」消費されるものであるが、ヌタと ie toga とは、つねに「公的に」問題と
 なる取柄であり、権力と権威とをその背後にならざるべき取柄の消費と禁止と
 を配分する、媒介としてほたらく。ま

た、イモはたちどころに腐敗すること
 により、ie toga はすでに浪費された
 生産的用役であることにより、破壊と
 死にまみれつつあるが、それに対するヌ
 タと女性とは、生きと動きまわってあ
 り、権力を解除しようとはかざる空間がとりわけて標的としなければならないも
 のだ。この取柄の多角関係が、サモアの取柄のシンボリズムの基礎になるだろうと
 予想できる。



古典的なサモアの交換システムが以上のようなテーマを秘めていたのがたし
 かだとして、いまわれわれの目の前にあるのは、それから逸出したものである。

Western Samoa の隅々をめぐる道路には、トヨタ・日産の車が列をなし、首都 Apia は、援助物資・輸入物資であふれかえっている。サモアの伝統社会は商品経済圏に完全にまきこまれてしまっており、そのただなかにある。どこでわれわれが相手にしなければならぬのは、一方の面は伝統的な交換システムであり、他の面は資本制的な商品市場であるような、双頭の怪物である。わたしのしるごのような経済学のテキストをひっくりかえしてみても、このような奇怪な社会システムをどう分析すればよいか書いてあるものはない。

現代のサモアの経済メカニズムを、各村々の *aiya* で代表されるような伝統的な交換システムと、首都 Apia で代表されるような市場的な交換システムとの複合として、思ひがこう。前者では、*ie toga* が貨幣類似物としてはたらいており、後者では、資本制的貨幣（サモア\$）がはたらいている。そして、この2つのシステムは、相互に乗り回している——*fa'alavelave* の交換品目のなかに、現金（サモア\$）が登場する一方、Apia のマーケットでは *ie toga* が売られているのである。

もしこの両システムの適合が完全なものであるとしたら、それは市場システムと異なることはないであろう。しかし、少くとも現状は、伝統的な交換システムは独立の経済メカニズムとしての自律性を保っている。それは次のような次第である。Apia のマーケットで売られる *ie toga* の価格（サモア\$）は、比較的に高い。*fa'alavelave* での交換比率を、相当に上回っているとみられる。*ie toga* は、慢性的に「不足」しているため、*ie toga* の需要はきわめて大きい。それに対して、*ie toga* の供給は、きわめて限られている。それを「売る」ことは、この上ない恥辱と考えられるためだ。（タロイモをマーケットで買うことも、同様に軽蔑の対象であるという。）このような規範感覚が生命を保っている限り、伝統的な交換システムは、その自律性を喪うことはない。貨幣（サモア\$）は、*ie toga* に対する購買力として現象できるため、伝統的な交換システムのなかでは、貨幣はただの商品引換券というのみをもちすぎない。それは、交換品目のなかのひとつにとどまるのである。だから、サモアの伝統的な交換システムを、貨幣（サモア\$）タームで集計し、分析しようとする試みは、的はずれである。集計因子は、古典的なモデルのもとの労働価値（＝労働時間）でなければならぬだろう。

ie toga が、伝統的な交換システムのなかで、どのような調節作用をはしているのか、また、貨幣の浸透によって、そのシステムはどのように変質を繰り返しているのか——こうした問いは、きわめて興味ある課題である。ここでは詳論する暇がなかったが、サモアのセンサス・データを使えるみこみがあるため、いつぞう突っ込んだ検討も可能となるだろう。それにはまず、古典的なサモア社会のモデルに、さらに磨きをかけること、そして、市場システムと *aiya* との経済的なつながりをもれなく洗い出すこと、が肝要であると思われる。

**

前号以来、コピー可能となったパーパ類は、次の通り：

- CN 105 「歴史：島所と全域における」（1980年8月）（¥125）
 - CN 122 「構造＝機能理論研究における若干の進展——志田の「同型定理」を軸に——」（1980年10月）（¥120）
 - CN 121 「サモアの交換経済——作業ノート——」（1980年10月）（¥30）
 - CN 120 「強い分解定理の不成立について」（1980年11月）（¥30）
 - CN 102 「〈言語〉派行動論の基本種図(3)」
 - CN 104 「〈記号空間＝社会〉論(1)」
- } 『止揚』33号(1980年8月)
(¥500)

数学に関する論稿をものする筈であったが、別の予定がとびこみきたりした関係で、目下のところ先延びしている。

荒尾、板垣の両氏からは、「生命科学と女性の権利」に対してお便りいただいたので、特にお願いして掲載を許していただいた。巨氏からは、さきに『「フィナンジャーは語る」か』の第1稿に対するコメントとして、今回引用したような文章を貰っていたのだが、その後の新資料を友へた後編を書こうか否かと思っただまごまごしているうち、紹介が遅れてしまった。類人猿の言語研究もいまの方法では、しばらく何も出てこないという気がする。

Geppo 17 Hashizume, Daisaburo : 5-9-11 Zaimokuza Kamakura 248
Phone 0467-22-1030 YOKOHAMA 51782 CN 107 ¥35./14 pages